

はじめまして！『体験交流工房わらし』です

紀州手漉

保田紙の里



わらしとは、ここで体験できるわらし細工の「藁」と保田紙の「紙」を組み合わせた名前です。

和歌山県の伝統工芸品にも指定されている保田紙の伝統は昭和40年代に廃絶しましたが、高齢者生産活動センターの誕生とともに復興しており、今年1月からはリニューアルした体験交流工房わらしでその技術を受け継いでいます。普段あまり見ることのできない、保田紙の舞台裏を紹介します。

和紙の原料となる楮は、100%地元産。楮は、水分のある日当たりの良い土地を好むので、棚田の畦や段丘面、田畑や屋敷の背後の緩傾斜地などで栽培され、独特の風景を造り出していました。

あらぎ島の天井田附近では現在も楮が植えられ往時の姿をかううじてとどめています。農業の変化や後継者不足等により成長途中で刈られてしまうことが多くなり、楮が減ってきています。

①楮刈り(収穫)

1年で成長する楮は、落葉後の1月に刈り取ります。生産者は年々減少し、高齢者が中心となって栽培しています。



収穫した楮を釜に入る大きさに切り揃えます。



釜吹き待ち



紙すきの話

紀州初代藩主徳川頼宣公がお国入りした元和五年（一六一九年）、藩内になかった製紙業を興すことを考え、藩内で一番若くて郷土愛の強い山保田の笠松左太夫が抜擢されました。左太夫は清水城主保田三

助の孫にあたりますが、故あって保田姓をすて笠松姓を名乗っていました。二十四歳で大庄屋を拝命し、開墾と水利に全力投入し、あらぎ島をはじめとする新田開発や井溝整備を成し遂げていましたが、それでもお百姓さんの生活は苦しかったのです。

うな山産物屋に仕立て、吉野の紙屋廻りをさせました。首を長くして待つこと三年、三人は次々と紙漉きの上手なお嫁さんを連れて帰ったのです。

紙漉きに必要な道具や製法を吉野へ見学に出掛けましたが、その土地の特産品であった吉野紙の製法は教えてもらえません。一旦帰郷し、何か良い方法はないかと考えました。

資材と用具も整い三組の夫婦でいよいよ紙漉きを始めましたが、土地が違うせいか吉野紙のような紙は漉けません。暮らしをよくしたいと夜を徹して工夫を重ね、ようやく紙が出来上がりました。早速お殿様に献上したところ大変喜ばれ、お城で使う紙を命ぜられたそうです。

そして、山保田組の中で凛々しい美男子を三人選んで女性の好みそ

左太夫は村人に紙漉きを広め、お百姓さんの暮らしを助けました。